

井植文化賞

戦後、日本の復興と繁栄に大きな足跡を残した三洋電機株式会社の創設者、故井植歳男氏の遺志によって昭和44年11月に設立された財団法人「井植記念会」が、兵庫県在住または兵庫県にゆかりの深い人のなかから、めざましい活躍をされた人を受賞の対象としてその功績を讃え、とともに、地域社会のより一層の発展に寄与したいと考え、この《井植文化賞》5部門を設定しました。今回で第8回を数え、各分野の評議家、学識経験者などをもって部門ごとに構成される選考委員会によって次のように決定しました。

報道出版部門



日中友好番組

「神戸からこんにちわ」
「天津からこんにちわ」
朝ラジオ関西

報道制作部

＜チームプロデューサー
代表・松田和子＞

日中交流の一環として、昭和56年6月18日付で「児童を主な対象とする15分番組を月に1回交換し合って放送する」という協定書が作成され、同年7月25日、「神戸からこんにちわ」がラジオ関西で放送が開始された。番組が放送されると、聴取者から「番組を通じて、日中両国の友情が深まった」などの投書が多く、幅広い層に関心を呼んだ。

地域活動部門



KICS

＜神戸インターナショナル・コミュニケーション・サービス＞

代表・臼杵百合子

神戸にやって来る留学生を物心両面でサポートする目的で、KICSが誕生したのは昨年の9月。その前身である「ふれあい神戸」は5年前に活動を始めた。とりわけ私費留学生の場合、学資に窮するケースが多い。留学生の日本企業へのアルバイトあつ旋をはじめ、茶道教室など日本文化のガイダンス、そして今年4月には須磨に自前で留学生女子寮を完成させた。現在、会員は70名。国際親善の架橋として高い評価をうけている

社会福祉部門



神戸東部地域 入浴サービス 実施委員会 会長・川口重義

ねたきり老人や身障者などの入浴ニーズを切実に痛感している福祉従事者の有志が、ボランティアグループを結成し、昭和54年に発足した。ボランティアが力を合わせ、入浴サービスを始めたのは高山市に次いで全国で2番目。会長川口重義氏（医師）を中心にボランティア90名が現在活躍中である。また、最近では、外国人も加わり、国際色豊かな、全国でも例のない団体として注目を浴びている

科学技術部門



西塚泰美

＜神戸大学医学部教授＞

昭和7年名古屋生まれ。現住所は芦屋市。京都大学医学部卒業、インターンを経て同37年京都大学医学部助手、同38年医学博士、同39年助教授となる。同年米国ロックフェラー大学客員研究員として一年間渡米。同44年神戸大学医学部教授として現在に至る。尚、同55年から岡崎国立共同研究機構の基礎生物学研究所教授も併任する。日本生化学会奨励賞、ペルツ賞、松永賞、武田医学賞など受賞も多い。

文化芸術部門



安水稔和

＜詩人＞

昭和6年神戸市生まれ。神戸大学英米文学科卒業。昭和25年詩誌「ぼえとろ」創刊。以後「交替詩派」「再現」「灌木」「くろおべす」同人、「蜘蛛」編集グループ等を経て現在「たうろす」「歷程」同人、松蔭中学校・高等学校勤務。昭和34年度H氏賞受賞（詩集「鳥」）、昭和48年度芸術祭優秀賞受賞（ラジオドラマ「旅に病んで」）他。詩作に加え、劇作ラジオドラマ、ドキュメンタリー、作曲等の業績が評価された。

■第8回井植文化賞

文化芸術部門

とりわけ作詩、劇作

放送の業績を評価して

安水稔和

選考委員

足立巻一

島京子

〈作家〉

〈作家〉

小島輝正

森川達也

〈松蔭女子大学教授〉

〈文芸評論家〉



散文の島京子、詩の安水稔和両氏に候補を絞って選考したが、島氏は選考委員であり第一回三洋新人賞（本賞の前身）に選ばれたという理由で強く辞退され、極めて自然に安水氏に決定された。

安水氏の才能・業績は拔群であり、わたしはかねてから竹中郁氏の詩業を継ぐ神戸の代表的詩人と評してきた。『存在のための歌』ら十一冊の詩集は最初から一定の完成度を示しつつ豊かな音楽性と深い思想とを刻々に加え、独自の言語空間を創造した。また、菅江真澄を追跡した『歌の行方』や『鳥になれ鳥よ』『きみも旅をしてみませんか』などの評論も強い個性を主張している。つまり、詩人としても批評家としても傑出しており、さら

に郷土詩華集の共編にも尽力した功績も大きく、近刊にはアンソロジー『神戸の詩人たち―戦後詩集成―』がある。

それらにも劣らずわたしが高く評価するのは、作詞・劇作・放送の仕事である。合唱組曲「京都」、放送作品「ニッポニア・ニッポン」放送作品「旅に病んで」はいずれも芸術祭参加作品として受賞したが、そのほかのおびただしい作品もいずれも詩劇にミュージカルに放送に新領域を開いて水準を高めたものと思う。わたしは以前に安水氏の劇作集あるいは放送作品集の出版を提唱したが、残念にもまだ実現を見ない。それどころか、こうした安水氏の業績は特に地元では意外に理解されていない。△足立巻一▽

●受賞者著書作品目録（二部）

△詩集▽

1955／存在のための歌

くろおべす社

1956／愛について

人文書院

1958／鳥

くろおべす社

1962／能登

蜘蛛出版社

1964／花祭

同右

1966／やってくる者

同右

1971／佐渡

同右

1977／西馬音内

同右

1979／異国間

同右

△エッセイ集▽

1973／幻視の旅

文研出版

1977／歌の行方―菅江真澄追

跡―

1981／鳥になれよ鳥よ

花曜社

1982／きみも旅をしてみませ

んか

△上演作品▽

1972／むかし海ミドリムシ

劇団神戸

1976／紫式部なんか怖くない

劇団神戸

1979／鬼の歌よみ物語

同右

1980／盗人志願

同右

△放送作品▽

1961／ニッポニア・ニッポン

NHK

1963／オオカミ

NHK

1964／教育について

同右

1965／地下鉄にて

同右

1966／にがい塩

同右

1973／旅に病んで

同右

1976／さらば西行

同右

1978／もうひとつの街が見え

同右

た

ラジオ関西

■第8回井植文化賞
科学技術部門

発癌や生理学解明の
研究を続ける

西塚泰美

選考委員

西羅 寛

〈神戸大学農学部長〉

溝井泰彦

〈神戸大学医学部長〉

松本隆一

〈神戸大学工学部長〉

真鍋正志

〈神戸新聞論説委員〉



がんがどうしてできるかは誰もが関心を寄せている問題であるが最近ホルモンや細胞生長因子の作用機構の研究から、その理解への緒が開かれてきた。私達のからだを構成する一兆個以上におよぶ細胞の多くは、種々のホルモンや細胞生長因子の作用を受けて常に入れ替っている。がんをおこす数多くのウィルス遺伝子と相同の遺伝子が実は正常細胞に作働しており、それらが細胞機能や生長を調節する種々の因子の作用の仕組みと密接に関係していたのである。

しるの解明に成功し、画期的な先鞭をつけて脚光を浴びている。細胞膜にホルモンや生長因子が働く、その構成々分の一つ、イノシトールリン脂質が秒単位で代謝され、そこから産生される様々な物質が細胞の機能亢進や増殖開始の引き金を引いている。また、古くから謎であった「発がん」の強力な促進物質、TPAもこの引き金物質の一つを代行していることが判明した。これらの知見が基礎となつてがんの成り立ちの仕組みが急速に理解され始めた。西塚教授にはこのため欧米各国の主要な学会や学士院からの招待があい続いでおり、今秋にはハーヴァード大学医学部に客員教授の席が用意されている。

〈溝井泰彦〉

●選考経過

冒頭に、現在の科学技術は機能性やテクノロジーを追及するだけのものではなく、人間性の尊重や回復も重視されるべきだ、との意見が出た。審査員全員がそれに同意を示した。

最初に推薦されたのが、今春オープンした神戸市立青少年科学館で天体望遠鏡をとり扱っている福田実信さん。子供たちに最先端の科学を紹介する同館にあつて同望遠鏡は異色の存在。大正時代以降に海洋気象台で使われていたもので最近では眠っていた代物。復活させた福井さんはアマチュア専門家である。

次に有機農業の分野も組上に上がった。ただ、さきの福井さんにしる、有機農業にしる地域活動部門との兼ね合いの懸念もあり、評価基準をどこにおくかが改めて問い直された。最後に昨年の候補の再検討があり、神戸大学の西塚泰美先生化学教授の研究は人間性を強く押し出した今回の選考に相応しいと全員一致をみた。

同氏の研究はホルモンおよび神経伝達物質の受容機構が中心である。発癌原因の発見や増殖作用の抑制、解析等の第一人者。「ネイチャー」「サイエンス」など外国雑誌掲載の論文も多い。

報道出版部門

神戸・天津両市民
友好親善の架け橋

ラジオ関西制作

「神戸からこんにちは」
「天津からこんにちは」

選考委員

坂上 豊

左藤 孜

（ラジオ関西西代表取締役）

（NHK神戸放送局長）

長島晴雄

（神戸新聞監査役）



你好、天津向你问候！（ニンハ
オ テイエスジン シヤニン ウ
エンホウ）——毎月第四日曜日の
朝八時、ラジオ関西にダイヤルを
あわせると、こんな、とてもきれ
いな中国語が流れてくる。日中友
好番組「天津からこんにちは」で
ある。

神戸市と天津市は、十一年前に
友好都市・友好港の提携をして以
来、さまざまな分野で活発な交流
を行っているが、両市の地元放送
局であるラジオ関西と天津放送局
では、三年前から毎月一回番組
（十五分間）を交換し合って放送
を続けている。

天津からおくられてくる番組は
もちろんすべて中国語。そこで専
門家に翻訳してもらったうえでデ

ィブを編集、日本語のアナウンス
をはさみ、聴衆者にも充分わかる
ようにしてある。スタッフの苦労
がしのばれるわけだが、華僑の多
い神戸ならではの番組として、皆
さんもぜひおききたいだきたい。

一方、ラジオ関西で制作した
「神戸からこんにちは」は、毎月
第四土曜日に天津放送局で三回も
放送されており、「中日両国人民
子々孫々の友好の種子が播かれ
た」といった感想文が寄せられて
いるという。また、この番組がき
っかけで、両市の小学生が習字や
絵画の交換をはじめするなど、「近
くて遠い国」といわれた中国との
友情の架け橋として、その役割を
充分果しているのではないかと評
価する。

／左藤 孜

●選考経過

神戸新聞がキャンペーンを展開
し話題となった、「加西市長汚職
事件」の報道記事、同社が25年に
わたって取り組んだ部落差別の問
題をまとめた「差別の壁の前で」
（解放出版社刊）、6年ぶりに発行
された「兵庫大百科辞典」（上下
2巻）、船田企画出版で、但馬の
文化財を紹介した「但馬の文化財
全6巻」が今年の候補としてあげ
られたが、神榮赴郷さんが実家の
寺に伝わる古事を原文、翻訳、難
解と思われる文字の注釈でまとめ
た「峰相記」とラジオ関西制作の
日中友好番組「神戸からこんにち
わ」「天津からこんにちは」の一
騎打ちとなった。

「峰相記」は、播磨の風土記、
郷土史の研究としては、一級のも
のであると評価、しかし、郷土史
の専門家の評価を得る必要がある
という理由により来年の候補とし
て保留となった。「神戸からこん
にちわ」「天津からこんにちわ」
は、約2年間続いているラジオ関
西独自のユニークな企画で、番組
の日中友好に貢献した功績が今回
の受賞の最大の要因となった。

最後に審査員の方から、神戸に
支社のある新聞の連載小説にすば
らしい作品がぜひとも掲載される
ことを望む声があがった。



■第8回井植文化賞 地域活動部門

日本で
一番ちいさな
留学生寮を創った

白杵百合子

選考委員

一谷定之丞

今井仙三

〈園田学園理事長〉

〈丸山地区文化防犯

協議会会長〉

長島晴雄

〈神戸新聞社監査役〉

●選考経過

今回、選考対象となったのは、
祇園健康高年クラブ、明石市民オ
ペラ協会、神戸市生活指導研究会
など。祇園健康高年クラブは、高
齢者を対象に「おしゃれ教室」「歌
合戦」などを隣近所に誘いかけて
行なうなど、企画力に優れた160人
のグループ。明石市民オペラ協会
は、3年前から音楽家・主婦など
が集まって結成され、専門家の応
援も得て地域ぐるみでオペラの普
及活動を行っている。歴史の古い
ところでは生活指導研究会が、昭
和28年以來家庭全般に渡るボラン
ティア活動を続けている。

一方、個人で神経症の相談を手
掛けて20年という68才の老人の話
題も出た。

また、選考の過程で、地域活動
としてスポーツ活動をあげるのも
いいのでは、という意見も出た。

ただ、いずれも独自性という点
で不満が残った。選考の最後に出
てきたKICS（白杵百合子代表）
については、留学生のよき相談役
としての諸活動が選考委員の評価
を高く受けた。

地域活動推進には、KICS
のようなグループを奨励すべきで
ある、と全員一致で受賞が決定し
た。

各国の留学生をサポートする
「神戸インターナショナル・コミ
ュニケーション・サービス」(略称
KICS・白杵百合子代表)は、
昨年九月に、70名のメンバーで発
足した。しかし、その前身である
「ふれあい神戸」グループの活動
は五年前の七月にさかのぼる。20
名のメンバーがポートアイランド
の神戸大学留学生会館に集ってス
タートしたのだ。

もともと白杵さんが、友人の依
頼で韓国からの女子留学生の買物
につき合ったことから留学生との
親交が始まり、在神各国留学生と
日本人とのグループ「ふれあい神
戸」が生まれた。年に三回の交流
パーティをはじめ、料理講習会な
どを通じ、留学生との物心両面で

の交流がつづき、一九八二年には
「留学生の故郷を訪ねる旅」の第
一回(台湾)が行われた。
兵庫県下には約30カ国、二六〇
人余りの留学生が勉学に励んでい
るが、経済面でのサポートが一番
望まれている。KICSの活動の
一つは、留学生へのアルバイトの
あっ旋だ。さらに、茶道教室。そ
して今年四月には、「目前」で留
学生的女子寮をつくりあげた。
KICSの活動に対する理解者
から空家を譲り受け、KICSの
メンバーが、文字通りに手弁当で
補修工事に取りかかった。

神戸へ来る留学生と日本人との
架橋役として、KICSの存在は
ますます大きくなると思われる。

〈長島 晴雄〉

社会福祉部門

ねたきり老人との
ふれあいを

神戸東部地域
入浴サービス
実施委員会

選考委員

服部 正 津田 元

〈松蔭女子学院大学教授〉

〈神戸新聞社社会部長〉

野上文夫

〈兵庫県社会福祉協議会
社会福祉情報センター所長〉



ボランティアが力をあわせ、移動入浴車で地域のねたきり老人や重度障害者に入浴サービスを始めたのは、高山市について神戸東部地域入浴サービス実施委員会（愛称ふれあいの会）が全国で二番目であった。

日頃日常生活の中で、老人などの入浴ニーズを切実に痛感している福祉従事者の有志が、ボランティアグループを結成し、昭和54年に発足した。会長川口重義氏（医師）を中心にボランティア九〇名が現在は活躍中である。

この会の特色は、医師、看護婦、保健婦などが3分の1参加し、社協、施設、福祉事務所、消防署の職員、主婦、学生など幅広い分野から参加したボランティアで互い

に連携をしながら入浴サービスを実施していることである。さらに最近では外国人数名も加わり国際色豊かな、全国でも例のない団体として注目を集めている。

活動地域は、東灘、灘、中央の三区で、毎週、水、木、金、日曜日の4回、15チームに分れたボランティアが2台の入浴車を使って走りまわっている。

発足して五年になるが、この会の指導助言で四つの姉妹グループが誕生し、各地で入浴サービスを実施している。また、この先駆的な活動が引金となって、神戸市で入浴サービス事業の予算化がなされるなど、小さな活動から大きな活動へと着実に輪はひろがっている。神戸にまた一つ新しい福祉文化が根づいてきた。〈野上文夫〉

●選考経過

候補にあがったのは、脳卒中者にリハビリの重要さを訴え、認識向上に貢献している「脳卒中友の会」会長の山本繁博、痴呆性老人介護のための家族の意識改革に取り組む「東灘保健所・精神衛生相談員」の森井俊次・土井寛子、全盲でありながら大学に通い、また、「音景色」という本も出版した村上八千代、東灘一中央区間でボランティアによる入浴サービスを続ける「神戸東部地域入浴サービス実施委員会」（川口重義会長）、地域分散型老人ホームのあり方を実践している「セブンスデーアドベントリスト教団エリア会」施設長の木下淳子などの各団体、個人である。

地域の中での活動実績という面から、特定教団の試みだが、54年1月、北区有野台にわが国初の地域分散型老人ホーム「有野台ファミリー」を建設し、老人を尊び、地域の中でともに生きるホームづくりを進めてきた木下淳子、55年4月より在宅寝たきり老人、障害者への入浴のサービスを続けてきた「神戸東部地域入浴サービス実施委員会」の2グループに絞られた。

一昨年、神戸市で入浴サービス公費制度実施の引き金となった点が評価され、結局「神戸東部地域入浴サービス実施委員会」に決定。

□第九回

神戸文学賞 神戸女流文学賞 作品募集

小誌は昭和51年に創刊15周年記念として神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。これを機に有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動の一層の発展のために微力を尽したいと願っております。過去の受賞作品は次の通りです。

- ・第一回神戸文学賞「島之内ブルース」(田原新二 尼崎市) 同女流文学賞「ベットの背景」(小倉弘子 大阪市)
- ・第二回神戸文学賞「迷捨て」(奥野忠昭 大阪府柏原市) 「生活」(吉峰正人 神戸市) この回の神戸女流文学賞は該当なしで、神戸文学賞を二作が受賞
- ・第三回神戸文学賞「自由と正義の水たまり」(斎藤一 奈良市) 同女流文学賞「夢の消滅」(大原由紀子 高知市)
- ・第四回神戸文学賞「落ける闇」(高木敏克 神戸市) 同女流文学賞「影と棲む」(田口佳子 伊丹市)
- ・第五回神戸文学賞「該当作なし」 同女流文学賞「痕跡」(久保田匡子 大阪市)
- ・第六回神戸文学賞「ガチャマン」(南禅満作 神戸市) 同女流文学賞「該当作なし」
- ・第七回神戸文学賞「凶鳥の群」(徳留 節 京都市) 同女流文学賞「花いちもんめ」(新光江 鳥取市)
- ・第八回神戸文学賞「昔の眼」(服部洋介 神戸市) 同女流文学賞「薔薇の覚悟」(菊池佐紀 愛媛県)

ここに第九回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第です。

△募集要項▽

一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、共に西日本在住者で応募作品は一篇に限ります。

一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限りです。

一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。

一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品主題(創作主旨)をつけて下さい。

一、締切りは八月一五日(当日消印有効)

△選考委員▽足立巻一・小島輝正・森川達也・島 京子

一、入選発表は本誌昭和六十年新年号誌上で、同号より作品を掲載します。

一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。

一、入選作品の著作権は本誌に属します。

一、入選作品各一篇には副賞として賞金二十拾万円が贈られます。

一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市中央区東町一三の一大神ビル九階月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。
電話〇七八—三三一—二二四六

主催／月刊神戸っ子



■いんたびゅう／珈琲飲みながら…

辻村ジュサブローに聞く――

人形にも 生命がある。

きく人／藤本ハルミ〈デザイナー〉

人形師。辻村ジュサブローの“ひと”とその芸術を見る「ジュサブロー芝居人形展―いのちなぞなぞ」が、六月十五日から二十日まで神戸そこうで開催。初日に来神したジュサブロー氏を、神戸の服飾デザイナー藤本ハルミさんがインタビュ。

藤本「辻村さんには、NHKの『里見八犬傳』以来魅きつけられまして、この人形を創っている人はどんな人かなと思って『王女メディア』も辻村さんの衣裳が観たくて拝見しました。泉鏡花の『風流蝶花形』『葛飾砂子』も博物館劇場で、『海神別荘』は神戸で観ましたが、従来、人形には感情を入れなかったけれど『入魂』といいますが人形全部に、かっちり性格が入っていますね」

辻村「芝居が子供の頃から好きでしたね。ほんと芝居の道に入りたかったんです。だから、創っている人形がドラマを持って来る、ドラマのある人形を創りたいと思うのですよ。だから、デパートで可愛いし、綺麗な、情感のない人形を見るとかえって悲しくなってくるんで

す。人形にドラマのある状態を写して行くと、楽しいこと、悲しいことを持つようになってほっとするんです。」藤本「でも、人形としては存在感がありすぎて、妖気が漂う人形の部屋を作らないといけませんね（笑）」

辻村「人間の日常の中でも、苦しいこと悲しいことがありますね。でも楽で楽しいことがあるんじゃないかって、何でも見るにつけ聞くにつけ、悲しみ、苦しみ続けてゆくと本当の喜びが味わるので、いつもぬるま湯の中にいるんじゃないかってだめじゃないですか」

藤本「辻村さんの舞台衣裳のデザインを拝見すると、日本のきものは別にして、王女メディアやクロスには洋服の造形がばっちりある。私たちは戦後、型紙の洋裁方式を教わって来ましたが、最終的には立体をやって、人間の身体にフィットさせた服づくりをして来たのですが、辻村さんの人形を見ると、まったくの立体方式（笑）ギリシャ風のあの造型的な形には、こんなのが創れるのかとびっくりしました。人形の身体に布を添わせて添わせて

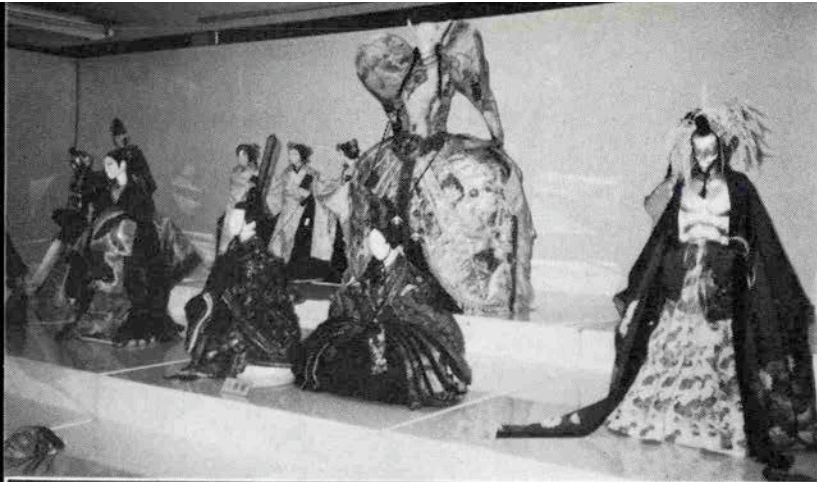
創ってきたという、型紙からでは創れませんわね(笑)」
辻村「そうですね。まったくの立体(笑) クリエーティ
ブな形で出来ているでしょうね」

藤本「外国へ出されたことは？」

辻村「まだ、これからなんです。自分自身が、ギリシャ
の物を創るときも、日本を引きずってんだから日本人と
して創っちゃう。ギリシャの時代に日本の布をこんな風
に使ったかなというようなことは考えないで、自分が考
えたもので創る。全部、メイド・イン・ジャパンの辻村
ジュサブローであって、洋風和風を全然考えていないで
す。

洋風は西洋人が創った方がより西洋的にテクニクじ
やなしに創られるのですから……」

藤本「女の立場から拝見すると、これは男でないとき



写真上は「海神別荘」の人形たち。(そこう
7F展示場で)
写真下は辻村ジュサブローと藤本ハルミさん。
(そこう7F辻村ジュサブローさんの売場—
この期間のみ)



ないですね。こういうイメージ。女だとフィニーぐらい
かな」

辻村「こういう隠微なお化(おぼ)の世界は男の領域かもしれな
い。どちらかといえば男からみた女をつくっている。

男には女の恐さが男には魅力で、これはやっぱり女が
女をつくっているのと違う。意識の中でなくて本能的に
出来上るので、出来上ると生理的に出てしまう。異性か
ら見た性。女形の魅力でもありますね」

藤本「私も日本のきもの地で洋服をデザインしているん
ですが、神戸は日本人じゃない外人の眼だといわれます
ね。辻村さんもお生れが満州でしょう」

辻村「そうです。満州、錦州省朝陽生れです。だからよ
く皆が、辻村は日本人じゃない。別のところから日本を
見ている。適当に大らかで、屈折の出方が強い」

藤本「そしてエネルギーが凄い」

辻村「今は、自分で創っていると、やらされている。天
命“みたいな、一とつ創るとまた一つ創る。だからどう
なるか、どんなものを創って行くか自分にも予想がつか
ないですね。只、今の時代はものを大切に作る時代でな
くなって来ているでしょう。物には生命がある。物に生
命を与えて大切にするといきいきとよみがえるんです
よ。だから後は自分の生理に忠実に人形を創って行きた
いですね」

藤本「人形展の他に、呉服売場で辻村さんデザインのき
ものも売っていますが、いかがですか」

辻村「人形は何もわれわれに要求しませ
んが、きものは“着たい”という要求に
応じなくてはいけないので、その要求に
応えて行かないといけない。

創ってあるものをその人の雰囲気にあ
わせて選ぶことが大事です。それからあま
り高価にならないことにかけています。
着ていただかなくては何にもなりません
ものね」

□キャンペーン □国際文化都市神戸を考える

81

神戸学会の設立によって 21世紀の都市づくりを!

□出席者

水谷 穎介 〈都市計画家〉

田口 寛治 〈神戸大学教授〉

森本 泰好 〈神戸地下街専務取締役〉

宮本 豊子 〈県立生活科学研究所専門員〉

— 今年3月のジャヴァ、ワールドなどの新社屋完成にともなって、ポートアイランドのファッショントウンがようやく界限としての姿を現わし始めました。コンベンション都市づくりについても、ワールド記念ホール completionも近づき、神戸国際展示場や神戸国際交流会館、ポートピアホテルなどの施設に加えて、ポートアイランドは全国でも珍しい価値あるコンベンション施設として脚光をあびています。

また、来年の夏には、'85ユニバーシアード神戸大会が行なわれますが、神戸市が全市をあげて、官民一体となつて、ボランティアや募金、文化などの幅広い十全な受け入れ体制を進めつつあります。

そこで、今回はこの辺で改めて真摯な姿勢に立ち戻つて、もう一度、神戸のもっている様々な問題について見直すことは、神戸のあるべき方向性を探り、ポリシーをより洗練されたものにするための良い時機ではないかと考えております。

今日は、神戸の将来について以前から積極的に取り組んでおられる方々にお集まりいただき、今までの経過を踏まえた上で色々なご意見をいただきたいと思います。

★第2期をむかえたファッショントウ都市づくり

森本 ファッショントウ都市づくりは、神戸の将来を左右する大きな課題です。それだけに、ファッショントウ都市づくりだけの問題ですませるわけにはいけないと思うのです。



宮本 豊子さん



森本 泰好さん



田口 寛治さん



水谷 顕介さん

というのは、今の神戸を見直すことは、第一に「行政指導型」のあり方を問いた다는ことになると思うからです。かつて、神戸の基幹産業としての鉄鋼や造船などの産業群は、元来、地元にもける関心よりもむしろ中央へむける関心の方がはるかに大きかったわけですね。そのために、やむなく地元産業は行政指導型の方向へと進んでいった。ところが、現在にいたって行政指導型のままではファッション都市づくりにも実に難しい部分がではじめている次第です。行政指導型においては、まずどの企業も公平に、かつ、バランス感覚を保ちながらというわけですから、当然、各企業がのびのびと成長しにくくなってしまふ。確かに、ここまで神戸がファッション産業面で伸びたのは、神戸市の貢献が大だといえるのですが、これからの神戸を考えると、どうしても行政指導型では伸びるものも、芽をつんでしまつて、どうも方向を誤つてしまふのではないかと、多少の不安を感じています。ファッションは、何といつてもきれいなことではないんです。ファッション産業、つまり、新しいものは、その奇抜な発想のために、いつの世でも異端視されるのが常です。異端がやがてはカジュアルになっていくわけですね。これは行政指導型ではとても対応していけない性質のものだと思います。

水谷 神戸以外の都市、たとえば、広島、福岡と比較すると行政がリーダーシップをもって頑張っているという点では、神戸市は評価しなければなりません。評価した上で、いつでもこれでいいのかというやはり疑問が残るわけです。大企業よりも地域に密着した産業があつてこそ、地元を大切にして地域とともに発展していくわけですから、どうしてもお役所の指導だけでは地域産業の多様性に応じきれないんです。神戸は、洋菓子や家具、アパレル、真珠など、早くから「衣・食・住」関連の産業をファッションとして捉え、独自の方向で伸びてきて実績もあります。

また、京都や大阪も神戸と同様に地域型産業を生活文

化産業というふうには呼んではいませんが、私はそれぞれ少し違うと思うんですよ。むしろ、京都は生活伝統産業であり、大阪は弱電気とか、住宅設備などの生活装置産業だと思ふのです。そうしてみると、神戸はライフスタイルを創造する生活様式産業だといえるんです。この場合は、神戸だけではなくて、芦屋や西宮などとつながった神戸ということになりますが、この阪神間プラス神戸は日本の近代をみても大変優れた住宅条件を備えた地域です。この基盤の上に持続されていく方向性を神戸は明確にうちだしていくべきじゃないでしょうか。

森本 確かに、神戸は大阪、京都と比べると趣きが異なります。以前から、京阪神三都市のファッション経済会議を重ねてきているのですが、ファッション産業のとらえ方がずいぶん違うわけです。というのは、大阪も京都もファッションといえば、繊維オナリーが発想しかめてない、神戸から出ている委員だけが「衣・食・住」すべてを統合した生活文化を創造するものとしてファッション産業だと口をすばくして説得してきたのが現状です。最近になってようやく大阪でも生活文化産業の意味が理解してもらえようになってきましたが、これは何といつても神戸にとって大きな成果だといえますね。

かつて10年前、昭和48年にファッション都市を宣言した時に、ファッションを流行という受けとり方をしていた人たちが大半だった。それを、ともかく生活文化だという水準にまでレベルアップさせたというのは、神戸にとって、この10年間の成果の一つです。しかし、安心はできません。神戸のファッション都市づくりについて、ようやく第一期がすんだというところで、これから第二期に入ろうとしているわけです。いよいよ、これからが大変だなという気がしますね。

田口 ファッションとは何か、という定義は別にして、神戸ファッションのあり方、基本的な神戸らしいあり方を考えると、私は4つの段階があると思います。

第一は、神戸を訪れた人が街角でふっと出あったおじ

さんなり、おばさんが「あつ、洒落てるな」と思う、そんな服装なり生活のし方をしていること。いろんな都市にそれぞれの都市の生活習慣があつて、たとえば私たちが沖繩へいけば沖繩独自の生き方を感じるのだけど、神戸の場合は、その程度の土着風俗的なもの珍しさではなくて、いつも生活の先取りをしているなと感じる、よその人が、神戸のごく一般市民の何げない生活ぶりからそれを感じとるような要素がなければ、神戸らしいファッションは育たないと思うんです。ファッション都市神戸の基本はそこにあるんですね。

第二には、よくいわれることですが、東京の人が靴だけは神戸がいちばんだ、というふうに、よその人が神戸にきて、小売り店の店頭で商品を見つけて「ああ、いいなあ」と思つて買ひ物をする。そんな魅力ある小売りがそろっていること、これが神戸らしきなんだと思うのです。第三には、これと矛盾するかもしれませんが、神戸の製造者サイドが、これが神戸なんですと、ある程度の広い範囲で神戸以外の土地に卸して立派に通用するものを卸せることだと思います。

第四には、最初に言いました市民全体の生活文化がよそからみて、とてもうらやましいと思える点を底辺とすると同時に、上の方からもそれを手さぐりする方法として、神戸の場合は国際性があります。国際性という点では神戸は度外視できないわけでもありますが、これによって生まれてくる第2、第3の交流はファッション都市神戸をより洗練していくと思いますね。私は以上の4つの段階が1つ1つあるのではなく、バランスよくないまぜになつて神戸をいい方向にもつていくのだと思います。

宮本 私は六甲で育ち、父が亡くなったため、少しの間大阪にいたことがあるのですが、当時、転宅したあと、何の用事もないうちに毎日神戸へきていたんです。神戸を離れてみて、神戸がいいなあと思ったのかもしれない。神戸の魅力について、どこがいのだろうと考えていた折りに、先日、東京からのお客様に「神戸のよい点をひ

と言で言って下さい」と聞いてみたんです。すると、「海と山が同時に見える」、これが素晴らしいと言うんです。さりげなくお洒落ができて、さりげいセンスがあるんですね。また、消費生活という点からみても非常に住み安い、日本でNO.1のいい品物がかなりそろっていて、それがトータルな調和を保っているのは神戸だけです。一方で、そういう恵まれた条件の中で消費者運動も行政指導型だったことも、よしあしでいえば発展の中途段階では確かによかったわけですが、今後はいろんな立場の人が一人歩きを始めなければならない時期にきています。森本 7月号の多田智満子さんの対談シリーズで、浅田彰さんが、神戸を表現するのに「記号論的構造をもった街」といっています。海と山、西と東というふうにパリエーションがあり対極が必ず記号的、複合的に存在する好条件の街だというわけですが、それだけに要求度も当然のことながら高い。神戸のよい条件を最大限に生かして、第二のファッション都市づくりへ向けて、神戸の各企業も一人歩きを始めてほしいものです。

★神戸に苦言を呈すれば「自信をもちすぎないこと」

宮本 先日、北野町を歩いていると、女子中学生が数人歩いてきてこんな話が耳に入ってきたんです。「うちのお父さん、神戸へ転勤になってくれないかなあ」って話していたんですけど、私はこれを聞いて彼女たちのもっているイメージがまさに神戸のよさなんだな、と実感しましたね。

森本 米花稔先生の言葉によると、神戸の特性というのは「総体的に日本の特色の少ない街」なんです。これは神戸の地理的、歴史的条件などから生まれてきたのだらうけど、伝統の重みにしばられることのない点を大切にしたいですね。ただ、用心しなければならぬのは、開港120年の神戸がぼちぼち、伝統らしきものにひきずられて、古くさい感覚に陥りつつあるのではないかと思う点ですね。

水谷 神戸は伝統がないというけれど、兵庫の街があったことといわゆる神戸の街の2つの文化があって、現在の神戸が存在すること、旧制中学でいえば、東の文化、神戸一中と兵庫の文化を背景にした二中、三中があったことは大きなことだと思います。たとえば、竹中郁さんや小磯良平さんのような人は、やはり兵庫を背景にして独自の個性を貫いてきた人たちと思うんです。それから新しい文化が須磨から生まれてきています。県立近代美術館の増田洋さんなどはその代表でしょうけど、ここで忘れてはならないのは、神戸が三宮中心になりすぎて、本当の神戸らしい知的エネルギーの充電できる場所が失われてしまう恐れがあることです。大阪へいけば、キタとミナミがあるように、神戸が少なくとも2つの文化背景をもって、三宮一色に染まってしまうことをさけていかなければなりません。

森本 現在の神戸にあえてアドバイスをするなら、どんな点ですかと、建築家の黒川紀章さんに伺ったんですが、あまり自信をもちすぎないように、といわれました。この10年間、考えようによれば、非常にラッキーな形でファッション都市づくりが進んできたのですが、自信をもちすぎると選択の幅が狭くなる、すると、純粹に純粹にという方向へと進んでいって異質なものを受けつけなくなっていく、というわけです。異質なものはじきとばしていくことはプラス面もあるけれど、大きな振幅はえられなくなる。文化が衰退していく過程は異質なものととの接触が少なくなり、文化的刺激を失いだしたときからです。言い換えれば、ある程度、異質なものを抱き込んでいくだけの許容性をもたなければならぬのではないかと、との話でした。私は、神戸が自信をもちすぎると危険だなと改めて思いましたね。

★神戸学の研究会を結成 神戸の将来を語りあおう

水谷 神戸の将来を考えると、東灘区や兵庫区、須磨区それぞれの地域がもっと個性をだしていってもいいと思

うんです。京都に、西陣とか室町という名が通用しているような形で行政区でなく、御影、岡本というふうにそれぞれが性格をもち、三宮にぶらさがることなく、街が連合して神戸を性格づける方向も生まれてきてほしい。

宮本 深江の生活文化資料館を訪ねた時、感じたのが今でも深江村という意識を保っている、これは大切なことです。

田口 神戸は、西区と北区がほとんど開発されていますが、将来は、この2地区が神戸の重要な生活地区となっていくでしょうね。そこで私は思うのですが、神戸市営地下鉄が来年には新神戸までのびて北神鉄道と連携して六甲山をセントラルパークにして、内まわり、外まわりの環状線化できればとても面白いなあと思っているんですよ。六甲山を単なる山としてとらえるのではなく、大自然を利用した市民の憩いの場として、神戸の交通網がこれをO字型にとりかこむというのはどうでしょう。

森本 それは素晴らしい。私自身、ポートピア⁸¹のとき、ヘリコプターで神戸の空を飛んだのですが、そのとき、本当に六甲山というのは、神戸にとって、セントラルパーク的存在だなと思いましたよ。六甲山を背山といったらあかん、もっとも市民に有効な方向へ役立たせ親しんでもらわなければと痛感しました。交通網についても緑のUラインではなくOラインにしなければいけません。

宮本 私の子供時代には、六甲山に登るまでに市街地から登山のブローグの道というものがありません。街から遠ざかってだんだん六甲山に近づいていくのに、胸の高なっていく気分を感じました。そういうブローグが今はすっかりなくなってしまったような気がします。これは六甲山に手を入れすぎたせいかもしれません。もちろん、人間の保護がなければ山は育たないかもしれません。田口先生の言われるような神戸のセントラルパークづくりのためには、手を加えることより、むしろ、ブローグづくりの方が大切だと思います。

水谷 神戸の将来を考えると、どうしても神戸の基本的なあり方を忘れてしまつては困るという気がします。六甲山もそうだけど、神戸はやはりミナトを中心にして成長していった街です。

空港づくりはとても重要なことですが、だからといってミナトは古いかという決してそうではない。神戸の基本は港です。港を通したコミュニケーションづくりを改めて見直してほしいですね。

森本 ファッション都市について、かつて畑専一郎さんが「神戸学」という一つの研究をライフワークとして一生を捧げられたことは有名ですが、今こそ、改めて「神戸学」をうちたてるべき時期ではないでしょうか。神戸という地域特性を背景に、本当の神戸らしさを「衣・食・住」のすべての面から総合的に扱い、神戸の明日にむけて、実戦的に研究しつづけていくこと、畑先生のライフワークの核をうけつぎ、実行していくための組織づくりと実行が火急の問題のように思います。

宮本 神戸が自信過剰になったらだめだというお話がありました。私もそう思います。神戸が自己満足に陥らず、たえず他の世界との対話をもちつづけるような謙虚さを忘れないでほしい。

そして、神戸は、水谷先生の言われたように、ユナイテッド、ブロックタウン・オブ・KOBÉであってほしい。さらに、アーティフィシヤル（人工的）にならないでほしいものです。

田口 ハーマン・カーンという学者の提唱する未来の都市像の条件があるのですが、未来などという前にびたり当てはまるのが実は神戸なんです。神戸は他都市に類をみない好適な条件をいっぱい備えています。これを本当に生かしていくためには、私も「神戸学」の研究が不可欠だと思います。そして、それが官民一体の協力によって一筋の誤りない未来の神戸を築いていくことになるものと期待しております。

(ブラン・ドゥ・ブランにて)

田崎真珠株式会社

取締役社長 田崎 俊作
神戸市中央区港島中町 6-3-2
TEL (078) 302-3321

株式会社ベニヤ

取締役社長 松谷 富士男
神戸市中央区三宮町 1丁目10-1
TEL (078) 332-3155

モロゾフ株式会社

代表取締役会長 葛野 友太郎
神戸市東灘区御影本町 6丁目11番19号
TEL (078) 851-1594



経済ポケット ジャーナル

★世界最大のコンテナ船
神戸に初入港

米国U・S・L社建造の
世界最大のコンテナ船「ア
メリカン・ニューヨーク」
(五七、〇〇〇ト、オーウ
エン・克蘭シー船長)が
六月二十八日、ポートアイ
ランド



アメリカン・ニューヨーク号

岸に接
壁に接
C6岸
は韓国
同船
建造で
これが
処女航
海。全
長は二
百八十九・五
三十二・二
三、船体は
二十
七コンテナ
が四千五百
個も
積めるスケール。

翌二十九日には出港、横
浜、ニューヨークへと向か
った。

★石野成明神栄石野証券
社長惜しまれる死去



石野成明氏

神栄石野証券社長の石野
成明(いしの・なりあき)
氏が六月二十九日、脳しゅ
ようのた
め東京女
子医大付
属病院で
亡くなられた。五十八歳。
七月十二日に神戸国際会館
でしめやかに社葬が行われ
た。

石野氏は神戸青年会議所
の六代理事長として活躍。
昭和四十年には神戸証券取
引所の理事長に就任、退潮
著しい同取引所の解散を断
行した。また五十四年から
二年間は神戸経済同友会の
代表幹事を務めた。神戸の
経済界にとって惜しまれる
死去となった。合掌。

★'84 K O B E インターナシ
ヨナル O A ショウ

(社)日本経営協会と(社)
日本データプロセシング協
会が神戸市と協力して、最
新の O A 機器を一堂に展示

・実演した「'84 K O B E イ
ンターナショナル O A ショ
ウ」が六月七日から三日
間、神戸国際展示場で開催
された。「O A が創る未来
と高度情報化社会」をテー
マに三十社が出品。
入場者も五万人を超える
盛況ぶり。

経営協会の大道勝英氏は
「家庭の婦人層にまで拡大
した市民総ぐるみの展示シ
ョウとして来年以降も定着



盛況の初開催

化させるつもり」と意欲を
みせていた。

★「飲食産業経営塾」が
第一回目を開講



熱心に勉強に励む

当日は60
名余りの
塾生が出
席、「成
功のため
の原理原
則を学
ぶ」をテー
マに四時
間の勉強
に励んだ。

冒頭、青木幸夫エルアイ
シー代表取締役が講師陣を
紹介、櫻木博JBC社長、
神原吉信(株)キャビン社長、
片岡巧男(株)アトム社長ら若
手経営者が体験や実戦論を
熱っぽく語っていた。

□同塾の問い合わせは(株)エルアイ
シィまで ☎ 3 0 2 - 4 0 0 9

★ K O B E オフィスレディ ★

宮本 香里さん(24)

△金盞酒造株式会社▽



上司からすれば仕事を頼みやすい素直
な感じの女の子といえそう。「頼まれた
仕事は遅くなくても最後までやり遂げま
す」と、それを裏付ける発言。ワープロ
導入を機に懸命に勉強中。現在の総務の
仕事に役立てたいところ。男性は真田広
之のようなスポーツマンで、他人を思い
やる性格の人が望み。長田区在住。

△その59▽神社に大宇宙の哲理をみる 天気下降と 地気上昇

垣内 秀夫

△元薙高講師、地理学者▽

先日地区のお宮さんの奉賛会の催しで、一泊二日の伊勢参りをしてきた。お正月の時分とちがって割合すいていて、お神楽をあげてもゆったりして、ゆっくりとご参拝が出来た。

伊勢神宮は皇室の氏神であると共に、日本に祭られている神社の総本社ともいえるべきものであることは誰でも知っている。敗戦前までは各地に伊勢講などがあって、全国からのお参りで賑ったようである。

伊勢へは小学校の時に修学旅行

で行ったり、その後も一、二回お参りしたが、その一つについて以下のべよう。

神社にお参りして社殿を見ると、屋根の上に鯉木と千木があるのを誰も知っている。その千木についてであるが、両側に出ている千木の先端の切り口が水平になっているのと、垂直になっているのと二つの様式がある。内宮は水平で外宮は垂直である。神戸市内の神社についても読者はよく注意してご覧下さい。

これは何を意味しているのかご存知でしょうか。筆者はずっと以前に、それは祭っている神様が男か女かを示しているもので、水平は女の神で、垂直は男の神だ、どこかで教えられていて、人にも自慢らしく説明していた。

ところが、大違いである。今回の旅の引率者である尼崎市の富松神社の宮司の吉見氏から、はじめにお聞きしたのであるが、水平は「天気下降」で、垂直は「地気上昇」をあらわしているのであること。これを聞いた筆者はうーんとうなった。

何んとすばらしい「大宇宙の哲理」を示したものであるかと。そ

う言われると、外宮の豊受大神宮の祭神は「豊宇氣毘売」で女神である。筆者の今までの知識では、千木の先端が女神であるから水平でなければならぬに実際は垂直になっている。

今の学問では、この地表上の生物、人間もその例にもれず、天空より宇宙線（プラナ）を受け、大地より地磁気の上昇流を受けているのである。この地磁気のことについては、今の人はほとんど知らない。ゴム靴でなく、わらじかぞうりで、または裸足で土の地面を歩くと健康によいと昔から言われているのはそのためである。

お宮やお寺へお参りして、ああ、ご利益があったとよるこんでいる。それでは神様がその人に何かそっとくれたのであろうか。ちがう。昔からある大きな社や寺は必ず土地の電圧の高いところにある。これをイヤシロチという。

ノーベル賞をうけた病理学者ギオルギ博士がその著書で「人体は電気のかたまりである」と言っている。人体は、否すべての生物も無生物さえ、男電気と女電気の二つによってつくられていて、天の気と地の気を通しているのである。全く人体は電気できているのである。その証拠に脳波や心電図がとれるではないか。

この地磁気の強いところが樹木もよく育ち大木になる。神社にはご神木がある。お参りすることによって体内に電気をとり入れてそのためにセイセイするのである



写真は東灘区本山町北畑の保久良神社の社叢である。（筆者撮影）